

大東亞戦争と東南アジアの国々（インドネシア篇）

本当に日本は東南アジアに対して悪いことをしたのでしょうか。決してそうではありません。本当は、東南アジア諸国すべてについて語りたいのですが、紙数の都合で、少しだけ例を挙げてみましょう。

インドネシアには「ジョヨボヨ伝説」という伝承があります。どういふ伝説かと申しますと、「黄色い皮膚をした英雄（インドネシアではトビメラといいます）が北方から現れ、白人どもを追っ払ってくれる。そしてジャゴンの花が咲く頃には、黄色い英雄は去って行く。」という伝説です。

インドネシアに上陸した部隊の中に、拓大出身で陸軍中野学校を出た柳川宗成中尉がおりました。彼が二人の通訳を連れまして、単身バンドンに乗り込みます、バンドンにはオランダ軍の司令部があり、テルボーデン中將が指揮をしています。柳川中尉は上陸すると、参謀の命を受け、単身バンドンに潜行するのです。オランダ兵の目をごまかすために変装して、道なき道を主に夜間潜行します。その途中で民家で食事を戴きますが、この時その家の年寄りが、柳川中尉を神様のように拝んで、厚いおもてなしをします。柳川中尉は不思議に思っ尋ねさせます。老人はジョヨボヨという伝説のトビメラ（英雄）が来たので歓待しているんだと言うのです。そこで柳川中尉は「よし、俺は今日からトビメラになろう」と決意して、オランダの軍司令部に乗り込みます。

「テルボーデン中將はおらんか、俺は日本の将校参謀だ」と言います。「今寝ています」とオランダ兵が言うのに対して、「それなら起こしてこい」と言います。その気迫に圧倒されて、テルボーデンは二階から降りて来ますが、足は震えていたそうです。柳川中尉はテルボーデンに迫ります。「日本軍はすでにここバンドンを三方から取り囲んでいる。貴下は部下将兵のため市民のため一刻も速やかに降伏しなさい。」と。柳川中尉も随分メチャクチャなことを言ったものですが、これが日本軍の上陸後七日目のこと。九日目にはテルボーデンは、チャルダ將軍總督以下三人を連れまして、白旗を掲げて今村軍指令官に降伏するのであります。何故このようにたいした大会戦もしないうちに降伏ということになったのかと言うと、インドネシアの民衆が立ち上がったからです。万歳万歳で日本軍を解放軍として迎えたのであります。オランダ軍は民衆から見放され、完全に孤立してしまつたのです。

次に日本軍はインドネシアを独立させるために、インドネシアの青年を教育し独立への気概を養成します。オランダは文盲政策をとっていましたので、例えば独立するにしても、指導者も行政官もいないのです。そこで日本は、インドネシアの将来を考えて小中学校を始め商業・農業・海産物学校など色々な学校を作り、中堅層をインスタント養成するのであります。それだけではありません。三万八千人の祖国防衛義勇軍（PETAといます）

を養成します。日本の陸軍士官学校に倣い、将校を教育し、戦える軍隊を作るのです。兵補、すなわち軍隊のお手伝いである武器弾薬の製造・輸送や、電話線を引いたりする兵卒を十万人作ります。これらが後のインドネシア独立戦争の主力となるのです。

さらに日本軍からは、終戦後帰国できるのに、あえて帰国せず、脱走してまでインドネシアに残留して、インドネシア軍を率いて連合軍と戦った日本の将兵は、一千人とも二千人とも言われています。四年間インドネシア軍を指導し補佐して共に戦ったこれらの日本兵は、戦死者だけでも四百名、現在なお帰国せずインドネシアに帰化している旧日本軍人は百数十名います。これらの方々はジャビンドウと言われ、インドネシア人から尊敬を受けています。

このインドネシアの独立がマレーシアに移り、ベトナム、ラオス、カンボジア、フィリピン、更にはインドの独立へと結びつくのです。即ち、アジアの国々の独立の端緒となったのが、日本が養成したインドネシアの祖国防衛義勇軍だったのです。スハルト大統領もその教育を受けたPETAの将校の一人です。PETAの人たちは日本が負けた後、インドネシア軍の中心となり、独立後はインドネシア政府の中核となったのです。

インドネシアの独立に貢献したということで、インドネシア政府は、国家最高勲章である「ナラリア勲章」を前田精海軍少将、軍政官の稲嶺一郎氏、清水齊氏、金子智一氏、高杉晋一氏ら七名に授与されているのであります。この一事をもってしても、大東亜戦争は侵略戦争どころか、独立解放戦争であったことがおわかりでしょう。